

国へ出るとき

田辺厚子 *Atsuko Tanabe*



文藝春秋

著者略歴

1935(昭和10)年、兵庫県生まれ。関西学院大学英文科中退。メキシコ国立自治大学ラテンアメリカ学科修士修了。現在、同大学助教授(日本文学・演劇担当)。

著書に『ピアノ・メキシコ』(講談社)『住んでみたメキシコ』『亡命の文化』(以上サイマル出版会)

住所=SERENATA 30, COLINA PEL SUR,
DELG. ALVARO OBREGON
MEXICO, D. F.

女が外国へ出るとき

1989年4月15日 第1刷

著者 田辺厚子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 東京03(265)1211(代)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 中島製本株式会社

© Atsuko Tanabe 1989 Printed in Japan
ISBN 4-16-343150-0
定価はカバーに表示してあります
万一落丁乱丁の場合はお取り替えいたします

女が外国へ出るとき□目次

第一章 私が外国へ出たとき

日本でのみじめな青春……………

9

一流商社で働けば、バネ仕掛け人生、消えていったお姉さんたち、大会社の人事構造、私の青春、結婚した私、大学へ行こう、外国へ出てみよう……………

34

海外脱出計画、メキシコの工商事、ふたたび大学生になった私、スペイン語を習う……………

第二章 女の海外留学

女子留学生たち……………

47

メキシコ大学、ある女子留学生のケース、学位はとったけれど、女子留学生の死「うるさい国」を逃れ出て……………

第三章 外国暮らしを成功させるカギ

一家離散と駐在生活……………

75

日本をきらい若者たち、去って行った息子「根」を失った美少女たち、文化のアイデンティティとは、アイデンティティの大切さ、日本を住みにくくしているもの……………

第四章 女が外国へ出るとき

とび出した女たち……………

115

日本レストランの女主人、海外邦字新聞の女編集長「移民」……………

と日本の女たち とび出した花嫁 メキシコと日本 戦争中の日本人 女流歌人あかね しあわせな老後

妻たちの海外駐在

ローカル組の妻たち 残飯 未亡人サロン ある復讐 逃げてしまった協力者 私のローカル体験 きらびやかな妻たち 貧乏教師になった私 本当の文化普及とは 私の日常生活

第五章 海外旅行に出る前に

服装について

エレガントに空の旅 避難民の一群？ アカブルコのヤンキー娘たち 服装のTPO 盛装は身を助ける

レストランでの心得

化粧なおしはトイレットで お勘定は男性に 男性へのサービス おごってもらったら

男とのつきあい

空港のガールハンターたち エスコートのいるとき

こまかいお行儀について

ひとの身体にさわらないこと トイレはきれいに なにげない思いやり こまかい注意 袖すり合うも しぐさについて

子供を海外旅行へ出す親へ

ありがとうのいない子供たち 人間として基本的なお行儀を

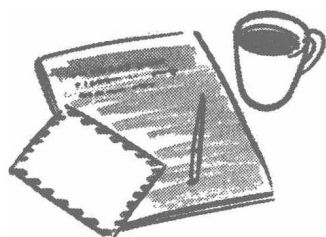
あながき

A 装
D 幀

坂 川
田 村
政 み
則 づ
え

女が外国へ出るとき

第一章 私が外国へ出たとき



日本でのみじめな青春

一流商社で働けば

昭和三十一年（一九五六）年、私は、日本の十大商社の一つといわれるＩ商事に入社した。

三十一年といえば、まだ戦後十年あまり、朝鮮戦争が終って数年、特需景氣を経て、日本が経済大国として、欧米先進国の間に擡頭（たいてう）しはじめる直前のことであつた。

Ｉ商事は、当時、大阪、本町二丁目にある六階建てのささやかなビルを本社にしていたが、折からの就職難で、そうやすやすと入れなかったのだろう、Ｉに勤めていますといえ、みんな目を丸くしてうらやましがった。なるほど、職場の仲間たちは、どこを見まわしても、いいお家のお嬢さんらしい人たちで、そのうえ、有名大学出の才媛ばかり、私のように、貧しい家庭の出で、学歴も中途半端なニキビ娘は、どこを見まわしてもいないのだった。

そんな私がなぜＩに入れたかという、他のお嬢さんたちとは、ちょっと違う専門技術を身に

つけていたからであった。

今は、大阪府立貿易専門学校という短大になっているけれども、その頃は、大阪府立貿易講習所という学校であった。高校のあと、一年間、貿易実務に関する、あらゆる知識と技術を習うのである。学生は、大学に行けない貧しい人がほとんどで、そこを出た人は、自嘲的に「おれは、所出身」などといっていた。タイトルはともかく、実力は間違いなくついた。簿記、ソロバン、タイプに始まり、商業文、商業・時事英語、商法、国際法、海上保険など、一流貿易会社で、永年実務に携わってこられて、今は重役になっている人や、現役の部長さんや社長さんなどが講師である。そんな国際商戦の実戦を経験された人たちの授業は、活気に満ちて、とてもおもしろかった。みんな、国際感覚をきっちり身につけた、厚みのある紳士だった。

十九歳になったばかりの私は、頭脳散漫でうわついた娘だったが、教育とは大きな威力をもつもので、一年終る頃には、貿易事務に必要な知識を一応身につけることが出来た。また、英語の力が大きく伸びたのも、この学校のおかげだった。

ふつう、大学新卒の男子社員が商社に入って、一年ほどの間に覚えることを、この学校を出た人たちは、就職した時点で、すでにマスターしていて、入社したその日から役に立つというのがこの学校の自慢であった。

例えば、信用状レター・オブ・クレジットだの、送り状インボイスだの、船積証ビル・オブ・レーディング券なんて言葉は、ふつうのお嬢さんは知らないだろうし、それらが貿易取引きのプロセスのうえで、どんな機能をするものかも、この世

界以外の人には、なじみのないことである。そこでは、英語の商業文^{ゴレガシ}の書き方や、海上保険証書^{インシュアランス・ポリシー}の読み方などもおそわった。その書類の裏面には、小さな字の英文で、ざっしり保険の条項が印刷してあるが、それを斜めに読めるようになるまで、しばらくするのである。

また、当時は中南米貿易が花形で、貿易をやる人はスペイン語が必須と考えられていて、スペイン語を習うのが若い人たちの流行だった。この学校でもスペイン語の初歩が科目にあって、先生は現在大阪外大の学長をされている山田善郎先生であった。

時事英語は、大阪の某大商社の通信部長さんが教えてくださったが、発音のきれいなダンディで、「日ソ交渉」だの、「バンドン会議」などの話で頭が疲れると、ゴルフスワージーの「りんごの木」なんかを、読んで聞かせてくださるのだった。

バネ仕掛け人生

さて、このような知識を覚えて入社した私が、I 商事でやったことは、来る日も来る日も、お茶のサーブिसと書類はこびであった。

今でも、女子社員のお茶汲みが相変わらず論議のまとなっているけれども、私はここで、職場における男女平等という立場からお茶汲みを云々しようとしているのではない。

基本的には、家庭であれ、職場であれ、男性と女性の役割が分担されてこそ、すべてがう

まく運ぶもので、世の中の仕組全体、自然界の動き、どれ一つとってみても、みんな陰と陽との組合せをもとにして機能しているのであるから、女性がオフィスで、男性社員にお茶のサービスをすることだって、なんら不都合はないと思う。ただ、お茶はこびと書類はこびに明けくれた、私の青春の貴重な三年間を思いかえすとき、なんともいえない無念さがこみ上げてくるのである。

入社式もすんで、いよいよ初出勤。ふつうなら新しいドレス、新しいバッグに新しい靴と相場は決まっているが、私は不思議に、初出勤の日の自分が、どうしても記憶にないのである。

とにかく、入社第一日目から、私のバネ仕掛け人生が始まったことはたしかだ。

六階建てのビルの三階フロアー半分が機械部になっていて、私が働くことになったのは、その中の輸出機械課というところだった。

本町通り沿いに面した窓側に、机が二列、向かい合って並んでいる。課長は、長い二列の机のいちばん奥に陣どって、課員を左右にギョロリとにらみ渡すようになっている。向かい合って座っている男子課員は、全部で十五人くらい。その三、四人ごとに女子社員がはめられて、彼らの手先となって追い使われる仕組である。

「追い使われる」などと激しい表現を使ったが、まさにその通りで、朝、男子社員が出勤してくると、お盆に湯のみを並べて、ひとりひとり配ってまわることから一日が始まった。

I 商事の中でも、機械部というのは、扱い額も大きいし、当時は社内の花形だったのでない

だろうか。とくに日本は東南アジアや、ラテンアメリカを相手に、機械を売りまくり、まさに笑いが止まらぬほど、もうけにもうけた時期で、輸出機械課はひっきりなしに国際電話が入る、国内のメーカーから長距離コールがかかる、テレックス、電報が入ると、沸き立つような騒がしさであった。

私の係は、一応課宛てに入るテレックスのコピーを整理してファイルするというものであった。ところが、お茶をくばり終って、さあ仕事と、椅子に座ったとたん、向い側から声がかかる。

「タナベさん、タバコ！」

立って、一階の受付のそばにあるタバコ売場へ駆けつけて、息せき切って戻ってくる。椅子に腰かけたとたん、横から声がかかる。

「タナベさん、これタイプ室」

五階まで駆け上って、タイプ室に原稿をおいて戻って来る。座るか座らないかのうちに、

「タナベさん、コピー！」

四階のコピー室でゼロックスをとって帰って来る。息切れがなおらぬうちに、

「タナベさん、タバコ！」

「はいっ！」

ピヨコン。(これは私の動作の態様語)

「タナベさん、テレックス！」

「はいっ！」

ピヨコン。

「お茶！」

「はいっ！」

ピヨコン。

「部長のハンコ！」

「はいっ！」

ピヨコン。

「これ、五階へ！」

「はいっ！」

ピヨコン。

朝から晩まで、階段を下りたり上ったり。一日が終ると、腰が抜けたようにがっくりして、へたへと座り込んでしまうのだった。こうして、数分ぎざみで追い立てられたおかげで、私はひと月も経たないうちに、バブロフの犬みたいにな、完全な条件反射動物となってしまった。

「タナベさん！」のタを聞いたとたん、とにかく、私の意志とは関係なく、身体がピヨコンと椅子からバネ仕掛けのように飛び上って、スックと立ち上り、駆け足の姿勢をとるといふ具合である。